

遊びへの参加とことば

榎 沢 良 彦

はじめに

わたしたちは、子どもであろうが大人であろうが、直接的な相互交渉の場面では、身体全体を用いてコミュニケーションを行っています。ことばも身体から発せられますから、身体によるコミュニケーションの一部をなしています。この身体によるコミュニケーションのなかでも、ことばによるコミュニケーションは、やはり大きな比重を占めていると言えます。子どもたちは一緒に生活していくことで、自分の欲求の赴くままに、相手の意思にはお構いなく行動するのではなく、自分の欲求や考えをことばに表して相手に伝え、相手の考えを確認するという仕方がかかわり合うようになっていきます。そして、子どもたちは、「相手に交渉するための手段としてのことば」の使用に習熟していきます。

園生活のなかでは、子どもたちは相手と交渉する必要がある場面によく出くわします。他の子の使っている遊具や玩具などを使いたいとき、あるいは遊びの仲間に加

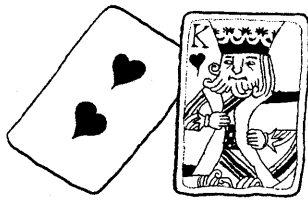
やりたいときなど、子どもたちは相手と交渉しなければなりません。そういう場合、わたしたち保育者は、自分の意思をはっきりことばに表現して相手に伝えるように指導します。そして、保育者の助けを借りずに、子どもが自分の力でそうできるようにしていくことを期待しています。

多くの子どもたちは自分の力で相手と交渉するようになっていきます。しかし、この相手と交渉するということは、かなり心理的な負担も大きく、容易なことではありません。まだ友だちとあまり親しくなっていない子や、内向的でおとなしい子の場合、友だちのしている遊びに加わりたくても、なかなかその気持ちのことばに表現できず、いつまでも周辺から見ることがよくあります。そのようなとき、わたしたちはその子が遊びだせるように、なんらかのことばをかけてやります。そのことばかけの性質により、即座に子どもが遊びはじめられたり、いましばらく遊びを躊躇することもあります。日常、保育者はおおむねうまく援助しています。しかし、

自分の行っている働きかけが、一体どういう性質のものであるのか、十分明確に自覚できているわけではありません。

実は、ことばはコミュニケーションの手段であるだけではありません。ことばは意味のある世界を生み出し、また変容させます。意味のある世界を生きている人間は、そこにある意味を見ていることにより、その世界に對してある態度をとり、そしてある関係を結びます。したがって、子どもたちの関係が変わることには、子どもたちの生きている世界の変容が伴って起きていると言えます。

遊びに加われないでいる子を、遊びに入れるように保育者が援助しているとき、あるいは、子ども同士がかかわること、遊びの仲間になるとき、



単に社会的スキル、あるいはコミュニケーションの手段としてことばが使われているわけではありません。本稿では、世界の変容という観点で、他者に対して発せられることばを考察し、保育者の援助のあり方を考えたいと思います。

一、保育者の援助によって子どもが遊びに加わる

事例一 こぶたとおおかみの遊びに参加できずにいた

A子とB男

(一九九六年九月一二日)

三匹のこぶたの話聞いた三歳児たちが、保育室で保育者とこぶたのお面をかぶって遊んでいる。その遊びに関心はあるけれど、仲間に入れないでいる子が何人かいる。A子もこぶたのお面をかぶっているが、仲間に入っていない。やがて、お面を外し、手で持っている。特に遊んでいるというふうでもなく、テーブルに肘をついたりなどしている。そのお面も片づけてしまい、何となくフラフラと室内を歩き回り、I先生と子どもたちの「こぶたごっこ」を見て、ニコニコしているが、やはり仲間

に加わってはいかない。

B男も、I先生と他の子どもたちがふざけ合っている様子を見ている。I先生たちが保育室から出ていってしまうと、B男は独りで椅子に座っている。おおかみに扮したT先生が、他の子どもたちと遊びながら保育室に入ってくる。子どもたちはT先生をやっつけようとしている。B男はT先生に近づき、何かを差し出す。T先生がそれを飲む真似をすると、B男は「それ飲むと元気になる」と言う。即座にT先生は「元気になった!」と答え、B男に襲いかかる。B男はおおかみに食べられまいと、逃げる。そして、素材置場から卵のケースを持ち出して遊ぼうとする。ところが、T先生が他の子どもたちとふざけ合っているうちに、B男は先程のように、その遊び仲間から離れてしまう。

やがて、I先生もT先生も子どもたちと広間のほうに行ってしまう、保育室にはA子を含んだ数人の女児だけが残る。彼女たちは畳のコーナーで「お家ごっこ」をしている。A子はその家のなかにいるのだが、ただ黙って

お家ごっこの様子を見ている。そこにI先生が「ただいま」と言っただけで戻ってくる。

I先生はA子に「Aちゃん、窓から何が見える？」と話しかける。A子は黙ったまま気恥ずかしそうに微笑む。そして、I先生の話しかけに答えるように、窓から外を覗いてみる。I先生が子どもたちに向かって「おおかみが来るかもしれない」と言うと、子どもたちは「大変だ」等と口々にいい、遊びが盛り上がる。A子も笑い声を上げ、完全に遊びのなかに入っている。誰かが「おおかみが来るぞ」と言うと、皆「キャー!」と悲鳴を上げる。おおかみに扮したT先生がやって来る。A子はすっきり楽しそうな表情になっている。そして、I先生に「おおかみがいた」と教えたりする。

この子どもたちと保育者が展開した「こぶたとおおかみの遊び」で、多くの子どもたちは互いにかかわり合い、楽しんでいました。ところが、A子やB男など、何人かの子どもは遊べてはいませんでした。A子は、特に

何かをすることもなくすごしていました。しかし、I先生たちの「こぶたごっこ」には関心があり、見ていました。A子は自分も「こぶたごっこ」をしたいのだけれど、仲間に入れないでいたのです。B男も同様でした。B男もやはり友だちの遊びに関心があり、近くで見ているし、ついて回ってはいるけれど、いま一步仲間に入りきれないでいました。A子もB男も「遊びの部外者」の立場ですごしていたのです。この二人に対して、I先生とT先生はある働きかけをしました。

「こぶたの家」のなかでI先生と女兒たちが遊んでいたとき、A子もその家のなかに入りました。一見すると、一緒に遊んでいるようですが、A子だけは他の人たちとは違う在り方をしていました。他の人たちは「遊ぶ在り方」であるのに対して、A子は「傍観者の在り方」をしていました。そのA子にI先生が「窓から何が見える?」と話しかけてやったことで、A子は笑顔を見せ、「遊ぶ在り方」に変わっていききました。

B男も、遊んでいる友だちの周辺をうろつくというよ

うに、「傍観者のな在り方」をしていました。しかし、B男もしだいに遊びに加わりたい気持ちが強まってきたのでしょう。こぶたたちにやつつけられていたT先生に力をつけるものを差し出すというように、自らT先生にかかわっていききました。このB男からの働きかけに対して、T先生は即座に応え、おおかみとしてB男を襲う真似をしてやりました。すると、B男は食べられまいとして逃げるといふように、「おおかみごっこの仲間」としての行動をとりました。このとき、B男は「傍観者のな在り方」から「遊ぶ在り方」になったと言えます。

このように、二人の保育者は、A子とB男の在り方を、「傍観者のな在り方」（遊べない在り方）から「遊ぶ在り方」に変えました。おそらく、この二人の保育者は熟慮した上で子どもたちに働きかけたと言ふよりも、瞬間的に、直観的に働きかけたのでしょう。しかし、それが子どもたちの在り方をそれまでとは違うものにしてしまったのです。

二、子どもが自分の働きかけて遊びに加わる

事例二 R男の家に自ら入ったA男

（一九九六年十月四日）

広間で多くの子どもたちが色々な遊びをしているなかで、R男は一人でずっと組木を使って「塔」のようなものを作っている。彼は、最初、短い木を使っていたが、やがて長い木を使いだし、構造物が大きくなっていく。どうやら「家」を作っているらしい。私はR男の側にしゃがんで見ている。すると、他の場所で遊んでいたY子が私のところに来て、「これあげる」と言ってキャンディをくれる。それを見たA男が「何、それ」と言って寄ってくる。三人でやり取りをしているあいだも、R男は黙々と製作を続けている。

U先生がR男の許に来て、一緒に遊びだす。U男は自分で作った家のなかに入っている。さっき私にかかわってきたA男がまたやって来て、R男とU先生のやり取りを見ている。そのうち、A男はR男の作った家に組木を

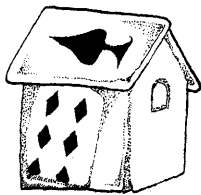
付け加える。R男は、さっき自分の相手をしてくれていた担任のS先生をつれてきて、家のなかに入らせる。そして、自分も入り、S先生と楽しそうに会話をする。側で他の女兒たちと話しているU先生も、腕を引いて家のなかに入らせる。三人で楽しそうに遊ぶ。A男は私と会話をしながら三人の「お家ごっこ」を見ている。そして、自分から「ごめんください」と元氣良くR男に言う。すると、R男は「ここが入口」と入るところを教え、A男を家に入れてやる。R男はお化け屋敷に行こうと、S先生を誘い、出ていく。家のなかにはA男とU先生が残り、二人でゴムボールを転がしたりして遊びはじめる。

この事例で、「家作り」と「お家ごっこ」の主人公はR男でした。彼は熱心に「家作り」をしていましたし、「お家ごっこ」も保育者と楽しんでいました。

一方、A男はどうでしょうか。彼は最初、R男の遊びに関心はありませんでした。彼は先ず、Y子と私のやり

取りに気を引かれ、私にかかわってきました。R男の側にいた私とかかわったことで、A男はしだいにR男の遊びに注意を引かれていったのでしょう。A男はR男とU先生のやり取りを興味深げに見つめるようになりました。このとき、A男は「R男たちの遊びの部外者」として、自分を意識するようになったと言えます。

A男はR男の家に組木を付け加え、それをR男は受容しました。それゆえ、A男は「R男の遊びの当事者」になっっているように見えます。しかし、この時点では、A男はまだ「当事者」ではありません。A男は家の外にいます。A男は、R男がS先生やU先生を家に引き入れ、楽しく遊んでいる様子を、外から見ていることしかできませんでした。遊びの当事者になりたい気持ちが強まったA男が「ごめんください」とR男に声をかけ、R男がA男を家に入れてやったとき、A男は「遊



びの当事者」になれました。それゆえ、その後は、A男はその家があたかも自分の物でもあるかのように、少しの遠慮もなく、堂々とU先生と遊ぶようになりました。

三、他者との関係を変えることば

以上の二つの事例のなかで共通して起きたことは、子どもたちの関係の変化です。A子と「こぶたごっこ」をしていた者たちは、最初は「遊びの当事者―部外者」の関係にありました。B男と他の子どもたちの関係も似たようなものでした。その関係が「遊び相手同士」の関係に変わりました。R男とA男の関係も同様です。この「遊びの部外者」が「遊びの当事者」に変わるといふ出来事が生じる上で、重要な働きをしたのは、「ことば」です。そこで、この出来事でのことばがどのような特質を有しているのかを考えてみましょう。

「こぶたごっこ」の場面で、I先生はA子に「窓から何が見える?」と話しかけました。このことばは、I先生

がA子を「こぶたごっこの仲間」として見なしていることを意味しています。もしも、I先生が「A子ちゃんもこぶたさんになる?」等と話しかけるとすれば、その場合は、A子が遊びの部外者であることが前提にされていることとなります。そうすると、A子は先ず、「自分と他の子どもたちとの間の溝」を意識させられることとなります。それを意識した上で、飛び越すこととなります。勿論、その溝は、それまでよりは容易に飛び越せるものになっています。それに対して、実際にI先生がA子にかけたことばは、A子と他の子どもたちとの間の溝を消滅させてしまっています。ですから、A子は仲間に入るための手続(例えば、頷くこと)をする必要はなく、自然に仲間としての行動をすることができます。

「おおかみごっこ」の場面でも、基本的に保育者は同様のほかわり方をしています。B男がT先生に何かを差し出したとき、彼はまた、「おおかみごっこの仲間」として行動していたわけではありません。B男はT先生をも含めた他の者たちとの間に「溝」を感じていました。そ

のB男に、T先生は「元気になった」と言って襲いかかりました。このT先生の応答は、もう既にB男が「おおかみごっこの仲間」であることを前提にしている応答です。したがって、B男は他の子どもたちと同じように、「おおかみごっこの仲間」としての行動をとってしまうのです。

では、R男がしていた「お家ごっこ」に加わっていたA男の場合はどうでしょう。A男はR男に対して、「仲間に入れて」と頼んだのではなく、子どもが「仲間に入れて」と言う場合、明らかに自分が「遊びの部外者」であることを前提にしています。したがって、相手と自分との間に溝があることを意識していることになり、同時に、このことは相手にも溝の存在を自覚させることとなります。

ところが、A男が実際に発した「ごめんください」ということばは、既にA男自身が「R男の遊びの仲間」であることを前提にしています。A男は交渉という手続きを経ずに、「いきなり自らをR男の遊びの世界に組み込

む」という仕方、R男に働きかけていたのです。R男の方も、その働きかけが自分の遊びの世界に位置付く働きかけなので、自然に受け入れる仕方、応答したのでしょう。

以上のように考察してみると、保育のなかで発せられることばには、「両者の世界の相違・立場の相違を意識させることば」と「両者の世界の相違を意識させないことば（両者が同じ世界を生きていることを前提にしたことば）」があることがわかります。後者のようなことばは、遊びへの参加を容易なものにしてくれると考えられます。

(富山大学)